

出定笑語講本

三

津田文庫
文庫 1
1576
3





出定笑語講本三

扱釋迦の死うらだうたつて後小迦葉が思ふ小何小
 したるらバ佛法を久しく世小傳つて未來世の人を此道
 小導うれ中うを是ハ釋迦一代の說法と結集しておくが
 ちいと思ひついでるら釋迦のありゆる弟子共と王舎
 城といふ所一集め此事を評議して迦葉ハ上足の弟子十
 や小依て會首と成つて其の大勢の中うら阿羅漢果と云
 ふと得たる者數百人を此人數或ハ五百とす出して
 七葉岩内といふ大なる石室の内小集集む其の事小か
 つたてニヤル時小其の中小彼の生涯釋迦の侍者と成つて
 左右小仕一殊小地獄再といふやう小覺えのちうつたる



阿難と居つたる所を迦葉ハ座より立て手づから阿難を
引出して云ふハ余清淨の阿羅漢衆の中ニ於て佛一代
の説法と結集せんとするハ汝ハ未だ阿羅漢果を得ざる
者ト也ト依てしゝト居らんと苦々しく云つたハ又此
時阿難ハ泣てしゝト我ニ十五年佛の左右ト仕つて居
つたる但し佛法トハ阿羅漢果と得たる者ハ佛といへ共
其左右ト使るぬ事故ト云ハ修行せんてなつたものト也
ト云つた所を迦葉ハしゝト汝さうト罪ト有る其罪ト
りぬト佛ハ女人の出家する事ト好まぬんだト汝をひ
勧めて摩訶波闍婆提の出家とゆるさるトやうト取持た
る相濟す又佛涅槃の時ト汝ト水と呑たいト云はれたる

所を汝夫と奉らぬト相する事ト又汝佛の爲ト其の法服と
たゝんたる時ト其の上と踏んだことト有る又中ト相
濟さる事ト佛涅槃の後ト其の陰藏相と出でて女人共ト
見せりしゝト相濟すぬ事ト也汝さうの罪共ト有
るト依て此席上下懺悔しんと云つたる所を阿難ト長老
のりト事故長跪合掌徧祖右肩と云ふ事トて懺悔した
ト云かん多れ共迦葉トおほゆるさず汝何れト未だ阿羅
漢果と得ぬらと述し此の衆中トハ加へられぬ早く阿羅
漢果と得て後ト来れ少トも煩惱の心を遣つて居るうち
ハ来る事勿れト云て突出して門を閉た下ニヤル夜ト至て
門を敲く者ト有るら迦葉ト誰トヤと問ふたト答へ

て我ハ阿難ト云ハシクモ来たる事ト云ハシクモ我今
夜諸煩惱を盡く拂て阿羅漢果を得たりト云ハシクモ迦葉
ガリハシクモ我汝を為小門と開く事ト云ハシクモ以て諸
煩惱を拂ひ盡くしたる事ト云ハシクモ阿難ハ心を得たといひ
最早神通を得たる
事故錠の孔ト云ハシクモ阿難ハ頭を擽て吾汝を未だ得
しなハシクモト云ハシクモ迦葉ハ阿難ハ頭を擽て吾汝を未だ得
道せぬ事をト云ハシクモ思てわざと晝の如く汝と責たのト云ハシクモ
依てありト云ハシクモ思ふ事勿れト云ハシクモ阿難ハ本の座ハ復した下
ト云ハシクモ扱結集ト云ハシクモつたる所ハ阿難ハ右の如く常ハ釋迦
の左右ハ居つたる者故ト云ハシクモ其ハ説法共ト覺えて居つた

でコヤン扱此説法ト云ハシクモ事共ト集めたる事ト三藏結集ト
云ハシクモ其ハ其説共ト忘れぬ事ト云ハシクモ綴り結ぶ集むると云ハシクモ
の心で結集ト云ハシクモ下コヤン其ハ三藏ト云ハシクモ修多羅藏
又素坦覽藏ト云ハシクモ毘奈耶藏ト云ハシクモ古ハ毘尼
ト云ハシクモ後ハ毘尼ト云ハシクモ阿毘曇藏ト云ハシクモ阿毘達摩藏ト
云ハシクモ是等の事共ハ佛書と讀每ハ出る言ハシクモ依て能
心得て居る事ト云ハシクモコヤン其ハ其ハ修多羅藏の修
多羅ト云ハシクモ言ハシクモ翻譯す事ト云ハシクモ糸篇ト云ハシクモ字と書たる
字の意言ト云ハシクモ即ち其の線の字ト云ハシクモ訓する文字ト
一体佛經ト云ハシクモ其ハ四句の偈ト云ハシクモ彼の諸行無常是
生滅法生滅々已寂滅為樂ト云ハシクモ其ハ類ひの事ト云ハシクモ有とある
もの下ト云ハシクモやうの辞共ト云ハシクモ間々文と云ハシクモ以て釋迦ト云ハシクモ

偈と唱へたれハ阿難ガ云々トシテ偈と唱へたト云々也
うふつあき合せたるもの故其の趣ミふとんと糸筋を通
して偈をつらり合せたといふやうな婆た故天竺辞下修
多羅といつたものや云々扱一切の経々が皆其のすうた
のもの故廣くいつの時ハ修多羅といふ辞ハ一切の経と云
ふ心ふしむる下云々 此翻契經古云又毘奈耶藏の毘奈耶
といふ辞ハ翻譯すれハ法律といふ言とるうて即ち佛法
のいまの律で云々 又此云調伏彼の飯ハ一日ハ一食
らふものやの乞食とするふハうするものやの何
のと種々の律を記したもので云々 又阿毘曇藏の阿毘曇
といふ辞ハ翻譯すきハ對法といふ言ふるつて 此古云無

近ハ大論ト中の婆沙論ト云々トシテ偈と唱へたト云々也
集めたるもの云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々
曇藏と藏の字を付けていふハ是も梵語下ハ俱舎と云ひ
ますト夫と翻譯して藏といふのである云々 又是等と藏
といふ云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々
扱後世ハ三藏と云つたれと法師の位の名と云々ト云々ト
の修多羅毘奈耶阿毘曇の三藏ト通してあると云々の心
下云々と位名と云々の下云々
扱此時迦葉ガ會首と成つて三藏を集めたト云々のもの
何そ其の説共と偕集めて書小記したと申すことでは不
い但し闡持不謬辨才無礙と申て覺えのよろしく其の教

とよく聞取つてつたる者共が釋迦の説たる趣なる指し
と互に口を誦し語り合ひ我が聞落したる事ハ彼も聞彼
も聞落してをる事とバ我が聞覚えたる所を誦し聞うせ
たるのこの事下らん其の中ハ阿難と申す者ハ右申した
る如く元來釋迦の徒弟で殊の外ハ物覚えよろしく且釋
迦ハ随從致して以來闍席致さず不断傍に居たるもの故
盡くよろ覚え居たと申す事下らん 一併釋迦の説教ハ
機に臨み爰に應じて才覺を以て申したる事下彼の禪宗
ハ申す以心傳心といふやうに譯せ有りまじうら文字ハ
記さるんがものでらん 是ハ實ハ禪家で申すハ相違も
ない事下らん 夫ハ大論ハ迦葉等が三藏と集むる事ハ誦

出がと云ふは以て知るよりの下らん 夫れ只口誦覚え
たる事といつたものでらん 尚ほ次ハ申す中ハ又うりま
す然るハ後世の僧共の偽り作つたる經論共ハ此時已ハ
多羅葉といふ木の葉ハ釋迦一代ハ説き教へたる事共を
記して夾ふ今ある經文下中と申すのハ皆事實と能く考
へぬ誤り下らん 實ハ此事ハ釋迦の本國たる天竺の僧共
漢土及び御國中も古より致し々名僧智識と云われたる
僧共中一人と致して夫れを心得たる者ハよく明ら
るハ知れんたものでらん 明らハ知れぬハ人の迷つて
をつたもなる事下らん 是ハ少く講談が横へはいるやう
たが所と大直日神のいふる御靈と賜いつたる事ハ最

早佛法の譯し世不明るふあり人の惑ひも追々ハ開くる
時節のめぐり来りたると見えてあやしいふ櫻町天皇の
御世しりしめす寛保延享の間ハ當つて津の國難波ハ富
永仲基と申す人ヲ有つてハ社ハ俗名を道明寺屋吉右衛
門と申す身ハ町人ありし甚だ筋の宜しき學風ヲ始めハ
その誰と知て居る三宅万年と申す其頃の大儒ハ從ふて
漢學と致し大ハ漢學の御國ハ害ある事ヲ發明致して
説藝といふ書今ハと作つて万年ハ見せたる所ハ三宅ハ
儒者の事故大ハ五腹致して相用ひず依て富永仲基ハ
万年の門人ヲ相断り夫より進んで佛書ヲ讀み彼の不凡
の大文を以て佛法の經論殘らずと讀盡し漢大和の佛學

者ハとより彼の釋迦の生國其の佛法の本國嫡々相承
の初師開祖と仰ふるハ名僧智識と曾て見らる考へ出
さぬ所の明説と云ひ出し諸佛經ハ一部一冊として釋迦
の真經でなく皆後世の偽作あるよしを發明致して名ハ
ハ出定後語定を出て後出たるといふ書二卷を著しハ辨したる年
ハ延享元年の事也其序ハ基也今既三十以長と有るより
ハ漸々三十有餘未だ四十ハ及ばぬ程のころハ見ざるで
アハ然も其世間ハ珍書と好む人の少いのら或ハ佛經と
論したるもの故等閑りハ善置たのらさらふ世ハ弘ま
らず誰と存した者ありたと見えて世間ハ一向其の
書ハあるつた所を我ハ師本居の翁ハいふよりハ此書

を得て之を讀み秋翁が随筆玉勝間小返す、襖め置り秋
たりやアト其趣ハ云々と云ひおうれた下アト篤胤此一
條と讀んで大小驚き即刻小本屋と詮議しよふと存して
西一三けり東一走つて江戸中の書林を残りず馳歩して
尋ねたる所が書名をさし知つた者がないよつて又思ひ
付て江戸小ハ程博識の多き事故誰を持って居る者も有
らざと存して知つた人小ハ逢て尋ね知らぬ人小ハつ
てと求めぬ問ひあるも致したる秋翁も誰あつて見た
といふ人小ハい剩さ一我翁の玉勝間小ハやう小云ひ
置り秋翁たるをさし小浮々と見過りて居たる人小ハうり下
アト爰小於て翁の讀秋たる本不有らふと存して松坂へ

申し遣はした所が知秋翁との事旁々大き小力を落して
又々考へ付て此地の田州秋田郡久保書林十四五軒一行
て上方へ注文を頼み又仲基ハ大坂の人故大坂の同門へ
云ひやうたるらばあらふとら秋翁と申遣へ又京都の
同門城戸千楯と申すハ俗名を名ひすや市右衛門と申て
本屋を致す者故あつて頼む遣はしたる所が此人も大き
小骨折て尋ねて呉秋翁へ幸ひ小一本を見出し京都よ
り早飛脚で此書とよこして呉秋翁下アト夫が此本で今
年うらハ三十九年以前の事下アト所が此通り板元と知
秋翁せん其中小彼の頼み置たる十四五軒の本屋共うら
ハ楯の處とひくが如く京大坂へ申遣はす彼是實ハ大騷

と入新た下アル所が大坂の何と云ふ本屋が其夏土
藏の掃除を致したる所が此板木の板が出たでアル夫迄
自分の藏板とも知らず小居たると申すこと下アル事
て其本屋の其砌中より一冊詮議の有ったこと故早速小
摺り出して江戸へ下り新た小包に紙一此書我が家の藏
板とも知らず下居たる所が本居先生の玉うのま小返す
返す稱譽せられて四方の君子の求を頻り小受此度
見出したる小依て摺出したる趣を記してあま下アル其
本がみ、う、この本屋より都合五本私方へおくりし
た其前小千楯が所より此本と云うて最早入り、ハせん
り秋共注文致したる事故是非よく其節皆買て置たてん

其後又更小賣ぬと見えて此節本屋を尋ねても又さつは
り毎ひてアル事す秋ハ彼の包紙小四方の君子と書たの
ハ篤胤の注文を三ヶの津より申てやうた故でハ、い、
と思ふやうな事下アル事程賣ぬとむる譯ハ佛經の論
て余り入用とふく又見た所が佛の經論と廣く見た人で
あくてハ分りぬる事の多き故下アル篤胤ハ何より
中珍書を得ると云ふ一人讀誇て居るが嫌ひで兎角人小
も其の善き事を聞かすたい、う、書と好きふ人ハ吹聴
して見せる所が此書は、う、ハ余程文字の文有る人も分
り、う、ぬ、が、多、り、下、アル、事、す、秋、ハ、賣、ぬ、と、む、る、事、で、
依て此書ハ、う、多、注、を、致、し、て、世、の、人、も、も、廣、く、合、点、さ、せ、る

積りで致しうけて置た下アト又其後不幸ひる事ハ赤
保々とし書を得た下アルれ蘇門居士服部天游と
申す人の著述不出定後語の後不出來たるもの故又一
さみちろい事と多く有る下アル篤胤ハ佛書の學問ハ
是等と構立と致して入り始めたらと彼の藍より出て
藍より青しと申すやう此二書の通りとも又余程考
へ出し夫下ろして佛道より起つたる好い^{サダキ}害と論辯致
す今度の趣意下アト我が翁としらせよとの事と見え
て佛法の事ハ余リ云つたす只此出定後語と譽めて置
れたことハ見えろ下アト篤胤ハ其の譽め言下依て此書
を得此書を得たる下様とてありて世の學者杯ハ廣く手

と出されぬと捨置たる佛法とも容易くうやう申さ
ろやう小成た事故云ひもて行けハ佛書の學びとや
はり翁小習つたやうあるものでアト兎小角翁小頭まの上
らんといふハ嘖ハ口惜い程の事下アト長ハ大キ
叔迦葉の輩數百人彼の大石室の内下兩三月の間小釋迦
一代の言教と論し定め迦葉ハ僧中の上座の者故其の結
集したるの上座部と申て釋迦の正統ハ此下アト所が
又未熟の者下やと云て其結集の中間を有る下たる數百
人の輩が相談して申すハ如來の存せ下ハ此方と俱小學
んだ事下有る下吾ら曹と簡ひのけると云ハ口惜いこと
下と云て皆々集り是の輩と師恩を報する為とて迦葉

等を集めたる三藏の上小雜集藏梵咒藏といふ二條を増
して都合五藏と結集致したてられ是ハ學無學を云ひす
數百千人下論一定めたる事故小大衆部と申しては秋則
ち旁流でアル

扱ふ様小岩内岩外と分つて結集致し正統と旁流と異ふ
秋も其説小於てハ異ふる事なく法唯一味二部和合し
て兩部共小其述る所いさむる小乘阿含部の旨して有と
以て宗とあり事皆名教小在て全く般若華嚴杯の類ひ大
乘といふ經共の如く高上微妙の説ハありつたもの故小
互小諍競とありつたもの下アル然る小右申す如く書小
記さす口で誦小傳ふる事故漸々小乱れ紛れ既小彼の

阿難が末年小或る山中と通た所ハ一人の沙弥が行々佛
語を誦しつた行くを聞く小大さ小間違つてなる故小教
ハ秋ハ其の沙弥を笑つて大徳ハ毫せり我ハ覺えたる
所ハ正しといふて用ひぬら阿難が大事小歎息したと
いふ事と西域記小見え又釋迦入滅後百年はよりと過て
ハ大さ小異論が出來たと云ふ事下アル夫ハ大論小佛滅
百年阿輸迦王作大會諸大法師論議異故有別部名字とい
へる小不知るべき事下アル是より後ハ多ク異説が起
りまゝてアル夫ハ婆娑序説小依て考る所を釋迦入滅の
後四百年許り有て北天竺の境ふる健駄邏國の王が毎小
佛經を習ひ日々小僧一人つゝと請待して法を説くのて

聞ひたる所は僧共の説同一うさる故に深く疑ひて是
合する事と深く疑ふたてて迦葉阿難より彼の上座部
正統の大法師脇尊者といふ小問ふたれ此法師の答ふ
如來去世歲月逾邇弟子部執據聞見為矛盾といふ爰小王
又問ふて諸部立範孰最善乎といふを莫越有宗と答つた
てアルところ不健駄邏國王を然らば其の有宗の部の三藏
と結集すべしとて有徳の僧共を名て共小評議せしめて
集のたるが今傳ひる毘婆沙論にやと云ふ事下アル此脇
尊者といふは迦葉阿難より正統の大法師ある故に執小
紀に問ふて釋迦の本義は有宗ありといふ言小落ついた
もの下アル又法顯の傳小法顯本求戒律而北天竺諸國皆

師々口傳無本可寫是以遠歩乃至中天竺於是得一部律是
摩訶僧祇律復得一部抄律可七千偈是薩婆多衆律亦皆師
々口相傳授不書之於文字と見え法顯爾時欲寫此經其
人云此無經本止口誦耳といつたとある杯る實小佛經共
ハ釋迦入滅後久しく書小記し傳へあるたものある事の
明らるる證據下アルところて人々定説する又依憑むつる
籍ある故小皆意隨小改め易一口づつら傳授し来つたと
のその後小書小寫したる故一切の經説を打合ぬ譯下アル
ふくて經々の初小如是我聞といふ事の有るハ文字の如
く我ハ是の如く聞りとの意小我ハ後世其の經々を
誦し説る者の自ら我といつる小釋迦文佛の説教たる

事の我が聞き傳へたる趣ハ是の如しといふの意で各思
ひし小釋迦の説ふ託して我ら思ふ者説出したるもの
でアル然るに次小作持る経説共小阿難登座稱我聞大衆
悲辨といつると始め種々の説あるハ後世小成たる経々
と皆三藏結集の時小阿難が如是我聞と云て誦し出たる
ものといふ心得たる非事下アル夫ハ如何といふ小我聞一時
といふことと多くあるが阿難ハ親しく釋迦小教を受た
る者なれば我聞一時といふづき由あり事下アル然る小
是れ又説を作りて阿難得道夜生侍佛二十余年未侍佛
時應是不聞と云ふ非下アル此説の如くあらハ既小釋迦
小侍つて後小聞るといふ経共小何以小復如是我聞又我

聞一時杯有るがら小不通の説下アル又或ハ阿難が釋迦
小願て未聞する所の経と重て説けといつたれば人小從
て聞たの或ハ諸天小聞たの或ハ佛が棺より臂と出
て阿難が為小重ねて説たの或ハ阿難ハ法性覺自在王三
昧といふ法を得たり故小未だ如來小侍つざる前小説
る経とも皆よく親しく聞たる経々と同小様小臆持て居
たるの或ハ釋迦の死ぬ時小我涅槃後阿難所未聞者弘廣
菩薩といふが當廣流布といつたの何のとあるハ経々を
皆阿難が口より出たるもの小せんといふ苦きまゝの妄説
で笑ふ小堪たる説共下アル實ハ諸経多くハ佛滅後五百
歳の人作説るものあり事を知らず後世の學者共皆徒小

教方の經說皆阿難が集めたるものと思ひ居るハ誠小愚
昧な事下アル

叔今ある佛經ハ誰と知て居る如く大乘と小乗との
の差別うある夫ハまづ小乗と云ハ阿含部と申して長
阿含經中阿含經相應阿含經增一阿含經の四つの阿含經
と始の此部の經共と総て阿含部といひ大乘家より之を
指て小乗といハ云下アル又其の大乘といハ般若經法
華經華嚴經大集經楞伽經大目經維摩經抄ハ類ハ此餘
ハも総て彼の阿含部と陋しめ貶し存けたる經共と大乘
トハ云下アル然ラハ其の大乘と小乗との趣意ハどこ
で違つて居ると申すハ小乗の經ハ釋迦生淨の事實ハ

就て此所ハてハ説法あり彼所ハてハ然ハ事有り
ト事實の因ハ道と説たる趣を見えて彼の脇尊者が健
駝羅國王ハ答へたる如く有と以て宗と致したもので
夫故大乘の經説ハくらづてハ説ハ淺く聞え下アル又
大乘と云ハ經々ハ有る趣ハ何れも高妙ハ取有たる
理屈ハ有りて小乗阿含部の經々トハ大小趣意の違つた
ものでアル然ラハ其の大乘の部と小乗の部と並べてハ
どちらが釋迦の本説トどちらが先ハ成たもの下ありハ
と云ハ下世の出家共ハ元より在家の人々ト生りやく
ハ佛書下も見うち輩ハ誰と此大乘の經々の説ハ釋迦
の本意下其説ハ高く尊く小乗ハ只愚くらと導く方便

説で卑いものなりと心得て居る是ハ御國ばかりてふく
漢土ても皆さうなればハ高き儒者ト也
可王元美と云ふ者採ハ此大乘の經々の旨の高妙あるげ
小惑つて其の云ひ置たる言ハ一切の經と皆釋迦の説を
と心得て居る其の間ハ後人の釋迦小託して造つた
るも有る其の大乗といふ諸經ハ識する事なく釋迦の
本説と見ゆれども小乗の經ハ佛滅後小竺土の僧共の
作つたもの下支と釋迦小託したものと云ひ置さま
したる是ハ服部天游が云つたる如くありやむ説
下何の事もなく大乘の經々の旨深げある小惑つて却て
小乗の經々の實事の有る事と辨へんとす依

て今篤流が此天游の説を本とす其具ハ何れが先何れが
後といふ事と申開らば大乘の經々の元より小乗阿含部
ト俱小釋迦の入滅後迦葉阿難の輩が三藏を結集したる
時よりハ最後の世の人の書たもの下其内小乗阿含部の
經々の先小記したるもの故十の中ハ三ツ四ツハ實小釋
迦の口より出たるもの事とあると大乘と云ふ諸々の
經共ハ総て全く後人の釋迦小託して偽り作つたもの
處ハある下アハ夫ハどうして知れると申すハ小乗阿
含部の説共ハ右申す如く釋迦生涯の事實と本小記して
其の事實の因小法と説ハ大乘の經々の説共ハ空理なる
りと云つたもの下アハ夫ハ譬ハ釋迦の行状と述る小

も小乗ハ十九出家三十成道八十入滅と云て十九歳の
時出家して三十歳の時小成道出山して叔八十歳の時
の毒小あなつて死んだ下アル有の儘小記して有る所と
夫でハ中つる凡人と同少事下面白くもふく余り小尊
くもふくより大成小ハ釋迦ハ久遠劫と云て限りもふく
遠き昔より成佛して世小出て叔叔り小滅度を示した
るれども實ハ入滅せん下常小靈山と云山小住下説法
して居ると云て有る下アル是ハ皆小乗の経々小記し有
る通りの事實なまづ有下後小ゆるゆるの空理と附會した
る事明ら下アル又小乗の経々小有る名目ハ其の義理ハ
正しく下隠れたる事多く聞える下アル所と大乘の方小

ハ多人ハ其の小乗部小有る名目を扱て夫と翻案して大
乗の義小取る下たこの下アル其の心得易く悟り安事
共々一ツニツいする下小乗部小苦集滅道之と四諦といひ
ます下まづ此苦とハ心の煩惱といひ集とハ種々の愚癡
心小集まる事といひ滅とハ其の愚癡煩惱と滅すると
いひの心道とハ其の如く愚癡煩惱と滅とてハ菩提の道
小入るといひの義下此苦集滅道の四つと四諦といひ下
アル有せ諦といひ下不有れハ諦とハ審實不虛の義と云て
此趣小違ひハ有い審小實ある事の虚うらさるといひの
義下アル夫故小乗部小ハられと有の儘小苦ハ實小苦又
集ハ實小因と説てある所と大乘小ハ諦といつと苦ハ

苦でもふく集ハ集てもふい杯何う高妙ある由ありけ小
説ありて有る又小乗小四大といふ説と云て有りませう
此四大といふハ地水火風の四つを申て此道理を以て天
地間の道理又人身の譯をも説たもので是ハ西洋の國々
でハ甚だ古くうら申た事下今以て阿蘭陀杯総て西の極
るる國々でハ是を四元と号て是下物の道理を樹てアハ
是ハ實以て心五事下アハ叔天竺で古昔昔うら此四大と
以て諸事を樹り釋迦より前の彼の婆羅門の輩も何れも
是を説き釋迦と夫とうけて説を立たる事故小乗部の經
共小四大と有るハ心五事下實ハ釋迦の真面目下アハ然
るを大乘部ハ此四大小空とらふ事を加いて五大とる

川たる新共空と云ふもの四大一委つてハ一向理小當ら
才開一ぬ事下アハ尚ほも加へて六大七大小も致し又
小乗部小六識と云事有り是ハ身意の識と云耳鼻大乗部小之小
加上して七識八識識六識小未耶識阿頼耶九識十識杯説く
是皆後々漸々小阿舎部の上りと加上して説を立たも
のでアハ但し是等ハ其の例を示さん為小ニワ三ワと擧
て申すのたふ餘も之小准へて悟るづ事事實ハ此類今ら
そ一と盡されぬ程の事下アハう新ハ先ハ小乗部があ
つて後小大乘部の起れる事疑ふく夾と大乘と号けたる
と阿舎部と陋めて自ら立たる筋を高ぶり自分と大乘と
云ふ小對して阿舎部小小乗と云ふ名と大乘家より付け

て云ひ賤したるが爲に阿含部を信ずる方々自ら賤めて
小乗と云ふは答ふにアハ、と考つても小乗が先
で大乘部の経共ハ後小漸小成たる譯ハ明らる事アハ
といふもの、其の小乗阿含部の経下さへ総て釋迦ハ本
より迦葉阿難およりと遙小後人の手小出来たるの小違
ひといへアハ只其の中大乘部の経共よりハ先小記した
りもの故小偽の功者といらぬ釋迦の真面目と眞の事實
も随分小有ると申すまで、の事アハ然らハ小乗の経々
も遙小後人の手小成たるものトヤと云ふとも如何して
知れりといふ云ハ小前小し云ハ如く彼の四阿含の内ある雜
阿含經を見せハ阿輪迦王と云者の法事といふを起した

る事を記して有る此阿輪迦王と云ハ釋迦の入滅して
より百年余り後の人アハ然る小此事を記して有るら
らハ又阿輪迦王よりハ小百年も後の世小記したるもの小
ハ違ひの在り事小知れりアハさすれハ此小乗阿含部
の経々と雖も釋迦の死してより三百年をこりも後小成
たるものある事彰々として明らる事アハ大乘の経々ハ
夫と押付よといふ趣意小うみ作つたるものあるは
是ハ又小乗部の経々よりハ遙小後小出来たる事更小論
ハふくむ夫ハ一人の手でハふく次々思々小天竺人共の
釋迦小假託したる事アハ夫故諸經小釋迦の語とて後
五百歳といふ語をたんと有る是ハ其の経々を偽て作る

者共釋迦よりハ五百年も後ハ已等ヲ作つたものと釋
迦の也説たのし中と云テ弘める事故うやう云つたもの
不迫ハ法華經ハ後五百歳弘宣布と有るも吾死
したる後五百歳より少シテ此經ヲ弘く流布するであ
らうと釋迦の未然ハ云テ置いたやうと思ハせたもので
アハ

叔右の如く見識を立て眼と活して見てゆくと何經が前
ハ成テ何經が後ハ成たるといふ事まで巨細ハさうさ夫
ハさう前ハいへる如く佛滅後ハ迦葉阿難の輩が彼の石
室の内ハ結集したるハ上座部と云テ釋迦の正統ハ是即
所謂小乘阿含部の者でありやうなまた彼の結集の人数

と有る新たる曹數百と云石室の外ハ集つて結集したる
大衆部と云と説ハ於てハ五ハ異ある事ハあうつたハ佛
滅の百年許り後ハ右の大衆部の徒の中ハ大天といハ者
有テ始テ異見を起し別ハ新義を立て生死涅槃皆是假名
と云の者と唱へたる是れ佛テ般若經の空假の者で後世
大乘の説の起たる基ハアハ斯テ此説と大衆部の徒ハ
信して用つたハ上座部の徒ハ其の旧義ハ違ハ事と悪ん
下用つたハ小乗説を起し互ハ誇り合テ和合せらんたと
云事下アルハ説叔後ハさう此空假の者と唱ふる者多
く成つたと見えて前ハ申たる釋迦の入滅より四百年許
り後の事でありませぬ彼の健駄羅國の王ハ佛等の傳ハ

説の各異ありと疑ひて上座部正統の大法師脇尊者小同
ふたど此法師の答小莫越有宗と云ひまゝたは此有宗
と云ハ三世實有といふの義下即ち上座部の正統阿含部
の旨下アル然れバ此時分ハ大天云ひ出たり空假の
者と唱へたもの多うな事と知れ下アル故小夾ハ
釋迦の本義下ハ有宗の旨本義下也と正しく答へ
たもの下アル是小依て思ハ般若經ハ大乘の部といふ
經々の中下アル早く成つたもの下也といふ事と明ら
小知れ下アル此經の旨ハ以空相と爲りて事皆方廣
と云て高妙小なくひらく仰山小説を成りたるもの下此
經の旨ハ諸法皆空下有る故小其の空ある理と悟り得よ

是則佛法の本意下ること悟る智慧と磨き出すハ此經小
説る趣るといふの義と般若と号けたもの下アル般若と
ハ天竺語下譯す此ハ智慧といふ義の語下アル此經ハ六
百卷有て仰山小多いが其の内肝要ある一卷と理趣分と
云ひます之を讀下見るとさう下アル

彼の禪宗又修験者杯のいつと讀むナカカラタレノリ
トラヤアヤア、ナカオリヤ、トラハ半分毛ヲムシラシ
人と云ふが此理趣分下アル
もと少いもの下ハ般若心經下も此譯を知らる其文下色
不異空、空不異色、色即是空、空即是色、とあります色と云
ふハ即我が身といつたもので文の義ハ我が身形ハ空小

異よりす空ハ身形ハ異よりす身即ち空空則ち是れ身不
り云ふ事ニアレト斯の如く何とも皆空ハおとすた
ハ阿含經の者ハ佛の本意でハふいと陋しめたるもので是
が所謂大乘の經の始りであるされど此經の成た時分ハ
未だ阿含の前とし般若の後とし年數の前後を論ずる事
ハあるつたもので阿含部と首張する者ハ如來の生涯の
説法ハ四阿含ハ止まるといひ

夫ハ智度論ハ迦葉語阿難從轉法輪經至大涅槃集作四
阿含増一阿含中阿含長阿含相應阿含是名修路路法藏
と有るハ知るかといひてアル修路路藏とハ上ハ申た
如く一切經藏と云ふ事ハアル

般若と首張する輩ハ如來得道の夜より涅槃の夜ハ至る
通常ハ般若と説きたといふアル

此趣も智度論ハ釋迦の初成道の事と記せる所ハ是時
世界主梵天王及色界諸天等皆請佛所勸請世尊初轉法
輪云々故受請説法諸法甚深者般若婆羅密是故佛説摩
訶般若婆羅密經と有るハ知るかといひてアル

是阿含部と首張する者も般若と首張する者も各其のよ
る所を正義として後世ハ云ひ出たる阿含ハ前ハ説たも
の般若ハ後ハ説たもの云ふやうな年數前後の説ハ不
うつたものアル

然りと法界性論ハ十二年説阿含三十年説大品即般若ハ

年説法華といつたハ下小引く法華經文小徒成正覺過四
十餘年云々と世一いふ事の有る小惑ハそれたハ非説でアル

斯くて般若の次小成たる經ハ法華經下アルを秋バと
して知るふと世一いふ小阿含ハ有と宗と為と般若ハ空と宗
と為たる故小此經を偽作する人ハ思ひ付て此ハ如來の
いつち末年小説たる經で此經の趣ハ真實の本意トヤ
是より以前小説ハ真實の旨下ハふい皆方便説トヤと
云ひ立たる其言小徒成正覺來過四十餘年無數方便引導
衆生我所説諸經法華最第一但為菩薩不為小乘觀諸法實
相是名菩薩行といつたでアル此ハ釋迦の道と弘めた間

凡そ四十年許りの事トヤ小依て此經ハ其の末年小説
ト小託して以前の諸説を陋しめ貶し又此ト實相ト託し
て阿含の有宗般若の空と破つて彼等ハ皆方便説た旨
トヤと釋迦の自らいつた趣小致したりの下アル
然る小後世の學者皆之を知らんて徒小法華經と宗と
致して釋迦の真説で實小經中の最第一と思つるハい
う誤下アル年教前後の説ト實小法華小昉り又權と
實ト小別つて是迄の諸教を係吞小致す事ト實小法華
小昉る廣大の方便説を以て古今の人と惑す事限りト
ふい事下アル天晴られとよく見明らぬ蔽りしハ
實小富永仲基功下アル

叔三藏の目ハ佛滅後小迦葉等ニ結集の時より起つた事
でアル然る小法華の文小三藏學者といつる言があるが
釋迦が説たる眞の經小此目のありし等があれ下アル是
を以て此經の後小出たる事不明小釈る下アル
此次小成たる華嚴經下アル此經の趣ハ阿含ハ成道出山
の始小説る状あり有と宗と爲し般若ハ阿含の後小説る
趣あり空と宗とあり法華ハ末年小説る由あり諸法實相
と云と者と爲て始中終の説が有る小依て是ハ入釈所が
ありし釋迦成道出山より直小此經と説たる共甚た
高い所下人に入りし故趣向と替つて阿含經以下
般若經又法華經迄と説たり共夫ハ方便小したる事下

實ハ釈が釋迦の本意小也と云ふが爲小其の性起品小
譬如日出先照諸大山王次照大山次照金剛寶山然後普光
大地日光不作是念但地有高下故照有先後如來亦然智慧
日輪常放光明先照菩薩山王次照緣覺次照善相衆生然後
悉照一切衆生如來本不作是念但衆生善相不同故此種々
差別云つるが此經の本旨下譬の意ハ如來の所説小固よ
り淺きと深きものうちハふい唯其の最初小説く趣らそ
眞實をれさど共衆生の根氣が同しうね小依て菩薩等ハ
聞て速小其他を被り緣覺の徒ハ中後被て其の化と被
り一切の衆生ハ又後小其の化を被つて皆各々其の徳と
成する法と説く如來小ハさう次々小化せんとし念ハ

ふい夫ハ喻一バ日輪の出テ山王といふづき大山と照一
次小夫より稍中卑き山と照一次小又夫より卑き山と照一
一叔後小普く大地と照せども日の光ハさう次々小照
さんといふ念ハるい只地小高き下は有て高い所ハ自ら
ら小早人光をうけ下い所ハ遅く光を受けら小同じ事ト
中と云ふ意で般若法華の旨と釋迦の本説でハふい初小
説た華嚴の旨ハ最妙の本旨ト也と託したものでアハ又
出現品小一切二乗不聞此經何況受持といひ
一切二乗トハ阿含部の小乗家と般若法華の大乗家を
指したもので文義ハ彼二乗の徒ハ此經の旨さ一聞
れぬ小ま一受持つ事ハさう故と云ふ事下アハ

又法界品小舍利弗不樂説不能讚嘆といひ如聲如啞杯云
つて有るハ智慧第一の舍利弗ハ此經の高妙ある旨を
得らぬ下悦びとせず噴嘆する事とさうす聲の如く啞
の如く黙然て居たとつ事下皆其の立たる宗を押張て
是述の經説を作さうとの事下アハ

叔此經ハ右小申した如く最初小説る趣小託したるさ
と廣ハ阿含般若法華杯よりハ後於て成た小依て遂小
其の尾と露リたハ可笑い事てアハ夫ハまづ小乗の
教有て後小聲聞の人ハ有つ事下アハ夫小此經入法
界品小舍利弗等の五百の聲聞有る小此時未だ小乗の
名さ一有ら小ゆうハ無い小舍利弗等何處より何の法と

と學人の聲聞といふ成つた事ども其の上舍利弗目連等が
釋迦小徒ふたは出山して暫く後の事下時と所も違つ
て居るを華嚴會小居合せたといふ事ども又祇園
精舎の佛成道六年の後始て達立致て然る小此經
成道の初小託しあるを委しく此事を述て然る小此經
んとする人と前後相違の事でもありませぬ。又諸法實
相般若波羅密の語の有ふ是小て此經の般若法華の二
經より後小成たと云ふ事小疑いもするべし
無量義經の法華經小黨する徒の華嚴小後述て作つた
もの下アハ是は其の説小初説四諦為求聲聞人中於處
處演説甚深十二因縁云々次説方等十二部經摩訶般若

華嚴海空法華會人佛慧宣説菩薩歷劫修行と有る小て
此經の法華經小黨する徒の華嚴小後述て作つた事小
明らる下アハ又四十餘年未顯眞實種々説法以方便力
と云ふ小て上小引る法華の文小徒成正覺乘過四十餘
年無數方便引導衆生我所説諸經法華最第一といふる
小合せ彼經の勝れた事を示さんとて作つた物で尼
華嚴の次小大集經涅槃經の説が起つた下アル夫ハ此二
經の者ハ大小二乗と合せて重きを其の涅槃小歸したも
のト十六年始説大集と云ふ如きは暗小阿含の後般若の
前小此經と云つて二乗の中間へ入れたもの下アハ又
其の律と説て如是五部雖各別異而皆不妨諸佛法界及大

涅槃といつた如きは是五部律の各々違つて居るのを合
さんといふの事下アハ然る小五部律ハ元八十誦中小出た
のを合て五部と為た事ハ釋迦入滅うら^達後の世の事
アハ

五部律とハ曇無德法密薩婆多有一切迦葉遺教論彌沙塞
無著有觀婆蹉富羅犢子摩訶僧祇大衆

爰と以て此經の後小出た事と知る下アハ涅槃經も又同
手下作つたものトヤ依て言語を多く似てゐる下アハ
則之を佛滅小託して此經の出入事年数の最後より由と
證し其の聖行品小譬如從牛出乳從乳出酪從酪出生酥從
生酥出熟酥從熟酥出醍醐醍醐最上佛亦如是從佛出十二

部經從十二部經出修多羅從修多羅出方等經從方等經出
般若婆羅密從般若婆羅密出大涅槃猶如醍醐といつて
十二部經とハ即ち一切の經といひ修多羅とハ其の中
小大小二乘小属さる別部といひ方等經とハ其の修多
羅の中小就て大乘と云ふべき經等と云ひ般若婆羅密
とハ其の方等の中小就て精あるものと云ひ大涅槃ハ
即ち大圓寂して般若の粹ある由小別つたもの下是大
涅槃經と作つたる本意下アル故醍醐といふハ牛や羊
の乳と段々と製法致した物下乳と酪とあり酪と酥と
あり酥と醍醐とあり其の醍醐ハ色黄白なり餅小
作つて甚うましく乳脯といふも此事トヤと申す事下是

此喻ハ元無垢藏王といひて涅槃の教の最も勝れたる事
と嘆た小依て釋迦の實なる事とやとて此五味の譬を以
て是近説り經尋より涅槃經の勝して濃く純粹なる事
と示したと託したものでん

此經右申す如くいづりまひ小説た趣に致したるは
共小乗部長阿含増一阿含杯少し釋迦入滅して寺小葬
り後小諸弟子説法する事追と載てある又龍樹が大論
小此經の事といふと説かぬいづら彼よりハ後小出た
と見ゆる下アハ

此次小頓部の説か起つた下アハ其の契經が二十許り有
て楞伽經ハ其の中不甚しいもの下アハ是ハ從前の諸經

の言説重く煩わしく其の説がうち合す近遠る小依て更
小激切ある語を發て其の言小一切煩惱本來自離不可説
断及與不断一切衆生皆是一切畢竟不生離諸名字即一切
法唯一真心一念不生即是佛とやう小環回とした説ふく
直切ある語を以て以前の諸經を打破つたものでアハ
後世菩提達磨ハ即此經小本ついで説をあり義小依て
文字小依らず始終一字を説うす實小禪家の元祖下アハ
叔其の窮まり小至つてハ乾屎橛を以て佛性と語つた
り經卷を付けたりする小至る是皆所謂頓部下アハ
禪宗の事ハ尚ほ下小申す事下アハ

叔見でハ最早偽作のしやうと有まいと思ふ所がまだ趣

向ふ一つ残つて居てお、下彼の所謂真言秘密といふ事
と作て以前の経々ハ何れも釋迦の實意下ハ不い其の秘
密の所ハ生涯顯さんで密ハ金剛手菩薩金剛薩埵といふ云
といふ一傳へたる所ハ金剛手菩薩られと南天竺の鍍塔
小藏のて知せず有た所と數百年の後小龍樹菩薩が初め
て取出したる経ハ云つて則三部の密経と世ハ小
所の大日経、金剛頂経、楞嚴経といふ三経と偽作して其の
教の趣ハ世尊得一切智々為無量衆生廣演分布隨種々趣
種々欲性種々方便道宣説一切智々或聲聞乘道或縁覺乘
道或大乘道或五通智道或願生天或生人中及云々各同彼
言音住種々威儀而此一切智々道一味といひ六度経ハ契

経如乳調伏如酪對法如生蘇般若如熟蘇總持門如醍醐と
いひ又樓閣経ハ真言是諸佛之母成佛種子若無真言終不
能成無上正覺又三藏経盡從陀羅尼所出るといふ如く
以前の経説と盡く陋しめおとて一切智々といふ事と
首張して其の一切智々を得れハ以前の経々小説ける事
共ハ心易く出来る趣といひとり其の一切智々を得んと
するハ真言下ありれハ得られすと遂ハ重きを真言ハ
歸したるの下アハ其の真言といふ彼の毘盧遮那阿字
門下それ所謂光明真言下アハ
但ハ阿含経以下楞伽経杯の事ハ龍樹の大論ハ其の導
引有りれ共此三部の密経と鍍塔ら得たるといふ

説の頃とあり、是下考つると此真言秘密の經共ハ
何れ龍樹より後の偽作小違ひハ、五以下アル尚下不
悉しく申す積リ下アル

是が諸教の起つた分ちて、其が皆元其の上くと云ひ上
けたもの下さうせねハ我立る道の張らたま故下アル扱
斯く後小出たる説程先小有る經共の噂を、下下押付け
る事故又小依て何經が前小成て何經が後小出たと云ふ
事不明小知れる下アルさす此ハ是ハ已れ、他の皮と顯
すやうなものの下アル尚下此餘小佛經ハ夥しく有とも外
ハ皆上小論辨したる經共の云ハ、枝葉下皆夫々一割付
らる、事故細く小云ふ下及下奴事下アル何と斯の如く

諸の佛經一部一冊も釋迦の眞のもの無く、盡く後の人の
偽り作つたもの小相違ふいふ、コリヤとあた、此譯トヤ
小依て諸經何れと云く、説ふ合す夫も阿含經
小ハ有と宗と、般若經小ハ空と宗と、法華經小ハ諸法
實相といつたやうな事ハ、機縁小よつて法を説た事と云
つて免して居るけれども、實事の上怪しう、ね相違ふ有
つて、譬ハ釋迦の事といふ、小二十五出家三十成道と有ら
と思へ、七七歳出家三十成道と云つたり、十九出家と有つ
たりして、甚だまらけ、い下アル然るを後世の僧共ハ
夫も皆彼の迦葉ハ法藏結集の時小阿難が覺えて居た事
を多羅葉の葉小記して有たものトヤと説ふとす、うら

ら下説か一つを合する付理屈を廻り遠く云
つて高妙小取るいたものやアル夫故漢土大倭の僧共の
佛經を注釋したものの只惑ひくさ小するはうり下一向
見る小足らぬもの多う下アル實小佛經の真面目と見
出さうと思ふ人佛經の中の名目位を古人の説小たよ
つて覺えたるうバ本文はうり下讀ふまのやアル是ハ儒
書とさうでアル余り古人の注解ハ頼も小せぬ事下アル
扱其の大乗の部といハ經々の中も何もいつち大事と讀
ものもや云ふも法華經下アル是ハ漢土大倭の名僧智
識と呼れたる僧共何宗小うもす此經を尊び其注解と屋
棟を穿つてうり小澤山有つて今の俗でも愚う存爺の

婆の小至る迄も第一の經とやと覺えらんで居る程の事
有れ共實ハ同く大乘といふうち小と外の經とよりハ一
向も味ひと何もふく只々のうらほういふるも大話しむる
り下其譯とバ説す此經一部八卷二十八品只さらびり
ふこんふ有れ共其の要とする所ハ只方便をいうる
甚深微妙の説が有るうと思つバ唯一乗法無二亦無三
といふ語の有るむうり下外ハふんやし珍しい事ハふい
唯一乗法無二亦無三ハ唯一乗の法有て二もふく亦
三もふくといふ事トやが其の二もふく亦三もふくと云
ふハ此譯とやし其の尊き譯と何もふいうらさら
そりけしらん譬ハ今一寸手紙を書ふ其の言ハ外小

比類のふせうまい物下結構トヤと書たるら其比類ふ
るうまい物の是とさす物ふ一つふけれはるらんハさふ
んと此方便品の語と其の如く唯一乗法無二亦無三と
いふうら其の指す物なるはれはるうぬ何とむいわ
ぶらだるんとつらうぬいふ又云ひ出しては怖の悪
ちい程たはける事ハ此の中の語ふられと持つくと誇る
人との罪報ひを記し持此經人功德百千万世不痛瘡口
氣不臭舌常無病口亦無病齒不垢黑不黃不疎亦不缺落唇
不下垂鼻不匾匯亦不曲戾面色不黑亦不隘長亦不窟曲と
あり此意ハ此經と信心する人の功德ハ千年万年過ても
あつと成らず口とくさくさもふく常ハ舌や口ハ病ふく齒

小垢も付らず黒くも成らず黄色くも成らず赤くもせず
欠もせず唇さうら鼻も曲りもせず頬の色ハ黒ら
らずせまく長いと云ふ事もふくすも曲りもせずと云
ふ事ハヤハ又是と誇る人の罪報ひを記して其の人命終
入阿鼻獄從地獄出常墮畜生有作野干身體痲癩亦無一目
為諸童子之所打擲受諸苦痛或時致死更受蟒身其形長大
五百由旬宛轉腹行為諸小虫之所啖食晝夜受苦無有休息
若得為人諸根闇鈍盲聾背偻口氣常臭鬼魅所著貧窮下賤
為人所使多病無所依怙身常臭穢淫欲熾盛不擇禽獸謗此
經故獲罪如是と有るヤハ此意ハ此經と誇る人ハ死す
時ハ阿鼻地獄ハ入其の地獄より出て又畜生ハ墮りて或

ハ野干と成りしうたハるますやうたいを煩ひ目といつ
ハたつた一ツ又諸の子供の為小打た、う秋ていりくの
苦しむと受又或時ハ死た上小死さらふうわすゝの身
と成テ其形の長き事四百里其うらだてろらと這歩
て小虫共の為小吸食ハ秋夜晝苦しむと受事ハ生るく
又万一人小生る秋ハ諸の事小暗くみぶく目がつ女秋耳
ハ聞えすせまう、曲り口ハ臭く又種々の物小取付と貪
乏や賤しくて人小使ハ秋又病絶ゆる事ふくする、ハ親
類もろく身ハ常小臭く又淫慾ぶさうりて鳥獸小限らす
つるむろ秋ハとりの小常小此経を誇るハ故小罪と得る
事斯の如く、ハとりの事ハゴリヤ皆人情の好ハ憎

む所ハ云つた事ハ愚ともあろ、な爺ハ婆ハと導くハ
是下も用とあす、と知秋人ハ秋共右ハと申す通り或ハ
持ち或ハ誇つて、やらの報ひと興つる其の物ハ何物ハ
やら秋ハ罰利生を見するといハ其の物ハ有り秋ハあら
んハかんぢんの其の物があ、いら是ハ薬と取落したる
能書見たやろ、あしめ下一向何あ、あらぬ物ハ何人
とらん、あ物と一塵ハ人間ハ懸く、いら、てハ、ハ、ハ、
ダバ誦下居るハさうケ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
ら味と知せぬハ識小讀下見るとあ、いら、と、ハ、ハ、
あ、ん、あ、物、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
腹さ、ハ、引、張、る、事、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
三三二

あうばあんくひしやせしせくといふ歌でも験し有
り薬の代り小其の能書と吞下し病がふほりコリヤ悪口
どぬい實小法華經一部八卷二十八函皆能書りゆり下
うんづんの丸薬ありやせんとの若し腹のまくらあら
ば其の丸薬を出して見せろとりのけり下アル後世の
日蓮杯といふ愚僧ハコリヤ云ふもたらぬ漢土でも
天台の智者大師杯いけはれ僧がきつく此法華經と尊信
して大らうくこり法解杯と書て世小弘め法華經の親
玉のやう小人云此智者が云一た事ハ頭と上らぬ
やう小人ハ思つて居る此方の目で見ると智者下ハ
く愚者大師と云ふ者下アルと此通り小拙

い者を若しうら取離したハと云ふと云ふ一俵の經
と偽書と知らず皆釋迦の眞の物と思つて居る故彼の四
十余年未顯眞實又無二亦無三杯といふ諸小自のうら
下頓と惚らこ又此法華經の内の二十五品目と普門品と
いふ是ハ一冊別小すり出して世間の人の觀音經と覺え
て居る是下アル夫故始の小妙法蓮華經普門品第二十
五とある是又一向小拙を物下と在家の愚夫愚婦と
勧誘ふ為小したるものと見えて將諸商人、齋持、重寶と云
ひ若、有、女、人、求、男、求、女、といふ類の絶て出家沙門の事下な
い下アル又此品の偈小呪詛諸毒藥、所欲害身者、念彼觀音
力、還、著、本、人、とある此意ハのちい事や毒藥と以て人の身

と云ふ人といひて其いひらるゝ人観音と念す
秋ハ却て其初に祈る人小ついで祈る人の身とそな
ふと云ふ事だろコリヤ佛道の意とい大に小たうつて居る
まんと大慈大悲と名付けられたる観音がうやうのむね
さる事をしつと云ふ漢國の蘇東坡といふ人の戯れ
小ら、と評して若し此語の如くあらハ菩薩の大慈悲と
いふものではないから秋小うつて下の一句還著於本人と
云ふを改めて両家拈没事と云ふたまらば真の事トヤと
云つたが事トヤ云ふ事トヤ又臨刑欲壽終念彼觀音
カ刀又断々壞といふ語は此品亦有る小依ては秋を不断
念して居秋ハ首の座小直つたる時太刀を折ると云つ

て既小此法華經宗の開祖日蓮小、辰口の難と云ふ
ろんふ事ト有つた秋と其の宗旨の輩の作つたる日蓮が
傳杯小書て有るが是ハ實小ふい事ト皆後の日蓮宗共が
主馬の判官盛久が古事とゆき人ト云つたもので夫故日
蓮が自書小無りヤ其の上主馬の判官盛久の古事と
誑杯小し有て古く云た事トヤがうや又漢土の古事と
盗んで云つた事ト其の古事の元ハ佛祖統記と云ふ物小
見えて有るが是も元ハ偽つた事ト違ひない銘て佛者と
云ふ者ハ今小鹿のちけるうそとついで夫と人むら
秋と恥とも思ひすくやあまくまじくとて居るコリヤ皆
釋迦の遺風と見えろヤ又と云ふ事ハ日蓮宗の者

ハ大うたハ觀者杯ハ拜ま本稀ふし拜む者有ると彼の
米の中一沙の文つて居る様る物トヤト云ふ譬ハ杯と
て誘法ト也杯と云て甚しきハ身の毛とよ立て騒くり執
共其の觀音ハ法華經第一のきハものだがどめハ
事ウコリヤ此普門品一冊別ハて觀音經と云て居るウラ
別の物トヤト思ふと見えろ下アル夫下と日蓮ハ傳小念
彼觀音カ刀及跋々壞の事實ト附會シたふとウハいでん
一体諸ろの大乗の經々ハ有る所の佛菩薩トウハ者ハ皆
其の經々ト偽作シたる者共のよいウザンハ杯つた物下
實以有た物下ハある皆彼のウラの古ハ文章ハ仮ハ人名
と作つて凶是公トウ烏有先生トウウハ事と書くと同ト

事下アル夫故トウウ出スルハたものだと云ふ事ト
あり執ハ行先ト居所ト知執ハ虚空ト同体トヤの極樂ト
云ふ所ハ居るのと云て紛らうたもの壞ハ有た人とハ
頓と名の譯ト下ハ能ク分る毘盧遮那阿弥陀觀世音不
動普賢文殊トウツたヤウハ名ナリ下其おんづマリと冥
鑿ハぬくと人の心の異名ハある譯下アル譬ハ毘盧遮
那トウハを翻譯す執ハ大日トウハ事ハ成て日輪の普く
世界と照すヤウある心徳と云つたものトウハ事又觀世
音トウハハよく世音ト觀トハ是も至らぬ隈なく人と惠
むトウハ心の徳と云たもの不動トウハハ心と氣海丹田
ハをトウハおさめて物ハ惑ハぬ所と云たものでアル倍ハ

しち振ふ不動經ハ尤も偽經の中の偽經なるが如く人のよく
知て居るもの故一寸讀ませうが其の文ハ是大明王有
大威力大悲徳故現青黑形大定徳故坐金剛石大智慧故現
大火焰執大智劍害貪瞋癡持三昧索縛難伏者無相法身虛
空同体無其住處但住衆生心想之中と有りませうがふんと
違ひあるやい総ての佛菩薩といふ者ハ皆らんる者で
同ト佛經の中でも誠小有た人の名ハはれといハ損と譯
違つて居る譬ハ釋迦第一の弟子なる摩訶迦葉といふ
名ト翻譯すれハ大龜氏といふ事小なる大龜氏といハ是ハ
迦葉が生れたる時龜が出たといふ下るやう小名と付た
るカ又舍利弗と云弟子の名ト翻譯すれハ鶯の子と云ふ

事小なる是ハ其カ母が眼の様子が鶯の子と有た故鶯
といふあた名と付たといふ事下アハ夫が生んだ子とや
小依て鶯の子といハの意下舍利弗と付たものでアハ此
外ハ阿難目連羅睺杯と始の皆うやうの譯ハ有た名の
付たものでアハ是等ハ甚た質朴なる事下面白の下アハ
之ハ引替彼の阿弥陀毘盧遮那觀音勢至普賢杯の類ハ後
人の後作つた名共ハ皆空理といつたもので小さうしく志
やらくさい下アハ
扱其の佛菩薩共ハ後世小偽り作つたもので下實ハ無い者
たと云るハ其の無ものある觀音や不動小祈つて験の
有るハコリヤと云ふや此中う小云ふ人もあらうが是ハ

うまく古の道と心得て神祇の譯をよく辨つると何の事
も無くさびける事少ゆが一寸いふるら此天地の間
小ハラの万葉の歌やも海原の邊小ハおひふも神集りう
くもひいすす諸ろの大神等とあるの意で海原斗りてハ
ふく神と人との差別可有る故人の眼小ハそ見えぬ共何
所々々神のまさぬ所無く其神々小ハ尊と賤とも善
と惡ともくちく有るとい其賤と神杯のちりそつて驗
とありて或ハ易の十翼杯小遊魂表とありと云た通り
小人の魂魄杯の寄付てあるとをあらわすのやアハ夫ハ
云々イハ草鞋大王鮑真神是等の事と考つて此道理を知るが
よい下アハ扱今日ハい序トハ依テ阿弥陀經の事と一

寸申し生せうふまづ阿弥陀といふものハ右申す通り元
來作りもの下實ハ無き物ある事是ハ論無く夫故後世の
坊主でも如在のふい草ハ上とそハ有る物のやう小云
ひ觸して物を貴しの種とたり此共實の所一行てハ既
小一向宗の有がたる書物小さハ阿弥陀とハ我ハ心の
異名也杯と云つて有る扱此阿弥陀經といふ物是も大乘
の經の部て其の拙きものある事ハ今更云ふ道ハ無り執
共余つ程下手な作者と見え是はうりの中で直小尾口
の合ぬ事な有る夫ハまづ西方十萬億土とやら小極樂と
云ふ結構な世界な有て阿弥陀がそこ小居るといふ事ハ
是ハ誰も知つたる通り扱るこ一生執たる衆生が身小皆

光明有り其の外何とも光り耀きて日月の光を借ん
でも常不闇くふいと云ふ極樂の證て是ハ諸ろの經論
小云て有り通りの事マレ然る小其の本文小晝夜六時
と云たり又清旦と云ふ事杯が有るゑんと此通り小晝夜
と云ふ事有たり又清旦と云ふ事有てハ中つけり此
日月の御惠をとりける所下此大地の内と見えるが扱ハ
此大地球の内小ハ人ふ國ハ絶えて無一此間より申す
通り此大地の内ハ御國程結構する國ハ無い事らハ
て載れ小云ハ御國杯ハ極樂と云ふ事國マレ西
方十萬億土天竺の西と其の結リ一行けハ大地ハ丸
日物故東へ出て則御國一来る事ハ御國杯マレ有る

せう但し是等の尻口合ぬハ此經の作者をつひ心付ふ
んたものハ又其文の中ハ彼ハ國常有種々奇妙雜色
之鳥白鶴孔雀鳥晝夜六時出和雅音と云ふ事の有るハ
一俤佛教の説ハ鳥獸小生れるのハ皆作つた罪の報ハ
下さう生れるといハ事ハ云ハ又極樂ハ生れる者ハ
総て善相を積た者下ふてハ生れぬといひるハ其所
小鳥を居てハ其の罪深き者ハ極樂ハ生れると云ハ
此た時小困るうら小能く尻と結んで勿謂是象鳥
皆是阿弥陀佛欲令法音宣流变化所作と云つた下ハ此
意ハ其の極樂世界小鳥を居るとて夫を罪報故小生れた
ハ思ハ思ハ是ハ皆阿弥陀如来其の佛法の

音と流布しふふが為小変化分身して鳥の形を現トなる
 一のたものトヤとリヤの意下アルトヤウの事共ハ何ト
 此方が申さずともある事ハある事共是ハ序トヤ小依
 テ申すの下アル
 叔釋迦ハぬれ衣うつくとやら實ハ一向知らぬ事世と後
 世の人の為小大を小無實の難と受て居る事下アル又総
 テの経々と偽り作つたる輩とさして長久小傳トヤト
 小意も無くいけハ愚夫愚婦のさとトトト一時の戯れ
 同様トトたるものたうトと思ふやうな経ト有る既小此
 阿弥陀經杯トさう下アル左様の拙ハ愚らあるものト世
 小弘まり夫と項小おト捧けて彼の草鞋大王の類ひある

有名無實名有て實無きものと拜ん身とさ(小捧て媚語のみの)團おのり下甚身の本たトハ身の本た
 有名有實名あり實ある我ハ皇神等とあるそら小あり
 奉るといハ是ト皆いひもて行けば禍神の心トハ申ト
 下らいとほろトく嘆りトト事下アル
 叔佛法の傳來ハ釋迦ハ初めて其の正統ハ迦葉迦葉の次ハ阿
 難阿難の次ハ高那和修尊者是より段々相承傳來トて其
 の十三祖ト仰く所ハ彼の大論杯と作つて大い小佛法と
 再興トたる龍樹菩薩下アル是ハ釋迦の入滅後七百年ト
 といひ五百年トも又六百年トも有つて何れトそれト極
 めうたいよめるれトもトト六百年といハ奉らふら
 しい事下アル元來南天竺の人ト其幼少の時うらまつく

利獲ふ生れて覺えともく天竺亦有る程の學び事ハ皆學
ひ盡したといひ程の事ハ尤彼の幻術扱も殊の外鍛練
して一俤ハ豪傑者と見え下アル或時ハ其契友三人と
相談して世間の神妙ある術ハ我ハ輩総て達して居る事
ト云ふんと此上ハ何と樂しきト云ふと思ふハ又聞
の樂まといひハ色慾ハ此上もふい樂まト云ふ依て何れ
隱身の術を學んで是ハ身の樂まとせよト相談致して
其術を知ら者の所へ行てとふ不習いたいと云つた所不
其人の思ふト此四人ハ才智拔群なる輩トあり我
が所へ來ていふらまのハ已れハ此術を知て居るうら
の事たさすれハ此方を授けてハ直ト已れトハ捨て仕ま

うたりふら是ハ授けぬふといと簡して青い丸藥一
粒宛と四人の者ト此藥を水で解て眼ト塗ると
ハ形不見えぬと教つた所ハ龍樹ハ其の香ひをい下
ると多味不樂と云ふと云つたれハ其師匠との
トあり我果て其法を授けたといひ事トアルそと龍樹
ハ彼の三人と右の藥を用いて國王の奥へ忍び入つて思
ふ儘ハ色慾をやつたる事数月の間であつた所ハ其の
奥の女共ハ跋々懐妊するこト國王ト大ニ小膽をつぶ
して是ハ鬼魅と云て妖物のトさる又ハ隱身の術を行ふ
者のトさる怪物多ハ跡ハあるまい隱身の術多らハ
人の足跡ハあらふとて砂を敷て置たる所ハ果して四人

の足跡不有るうらすいと云ふ儘不勤者の者を入社て人
見えぬり社共むやうと叙を抜いて振廻させたる所不頓と
三人ハ斬殺す社た其中ハ龍樹ハ利發者故王の側エくと
身を寄て居たる故其切付る者共と王の側ハ余り近く
切らけぬ爰不於て龍樹とありて固く誓を立て若し
此難を遁れらば出家と成て色慾を止めらんと心願し
てどこととありて此場を遁れて釈迦葉より十二代目
の迦毘摩羅尊者と云ふ弟子と成つて佛道不入り此横
着者の大才子といつくりうてさう成たる事故何の事
とふく九十日計りの内ハ三藏を通し刺へせ不あらぬら
事ハ學び盡したといふの意不自ら一切智人といつて居

たとひハ事下ヤル叔先程論辨致したる經共を取調べて
夫不活て讀むる物彼の大論を初め色々の論とも著して
諸所の佛經とせし傳エたるハ實ハ彼ら見ざ下ヤル夫
故諸宗於ても此者をハ釋迦ハついで尊む事下ヤル
叔佛法の漢土ハ渡つたる年ハ是も亦僧共の方下ハ一年
と先の事不しよふと思つて彼是と偽り申したる説共ハ
有るハ社共實ハ前漢の代ハまづ民間ハ渡つてあつたる
と見えて漢武古事又魏畧の西戎傳杯ハ其證據を見えら
下ヤル其の後後漢の明帝といふ王の七年ハ文六の金八
ハ頂ハ日の光を佩りて殿庭を飛行すると明帝ハ夢ハ見
えた下ヤルそらで諸所の目下ハ問ふた所を誰と答ふら

者の無つた中、小傳教といふ者進み出て西方小聖人有り
其名を佛と申すと承つて居るが夫でありと答へたる
所が明帝が然らば其佛法を求めよとて中郎將蔡愔秦
景博士王遵杯云々輩十八人と天竺一遣りて佛道を尋
ねさしたる年が八年の事であるに、彼等の蔡愔等、中竺へ
行て摩騰法蘭と云ふ二人の僧小出逢て夫を伴ひ佛像と
經論とも得て白馬小付けて明帝が十年小歸り来たて、
此明帝が金人を夢小見たる事、則ち例の幻術下此後
と度々有つた事であるに、此れより彼の國の民間小渡つて
有る所の佛者共、其道の世小廣く用へられ、其事と歎
て此術を行つたるものと見えるである、又彼の傳教が答

へ、のさすを考つたる所が彼奴民間小有る所の佛法を竊
小信して此術をも學び、明帝小夢を見せて疑ひを起させ
夫小答へてゐるは、公小佛法を弘めんとり心である事
ととも思ひ、であるに、群臣誰も知す答へぬ、其中小已
抽て西方小聖人有り其名を佛といふ杯といふさま已
の國の聖人といふ者より外、小ハよき人もあるものと只
管小思つて居たる、其頃のから人の口つぎとも覺えぬ事
であるに、其ある年小始めて白馬寺といふ寺を立たせ
アル、是が漢土で佛寺と違たるの始め、則ち彼の佛像經
論を白馬寺と付けた事と見え、であるに、此年彼の摩騰が
始めて四十二章經といふを翻譯致したて、是が佛經

と漢土で譯したる始めでアル然れ共此砌ハ佛法と云ふ
うありく未だ經文全部を譯する程の事と云く只々大部
の中より要文を抜いて譯したりの事下アル扱又漢土
小元より道士といふ者が有て是ハ此漢の代といふより
ハ二代先の周と云つた代小季耳といふ人の作つたと云
ふ老子といふ書を奉りて道と學び無為恬澹と云ふを
專と致して心を勞する事の無いやうに身を養ひ神氣を
練て長壽する事とつとむるの道下アル其神氣を練て心
を治むる所の彼の佛法より外道とさしたる天竺の婆羅
門の仙人共が爲る所と大に小似らつたもの下アル尤も
幻術をも行ふ者てアル漢土で仙人といふハ此道士のこ

ろろに經たる者仙術といふハ此道士共の爲る方術の事
下アル是ハ此ま一漢の武帝といつた王杯のきつく好ん
だものて其後大に小世に弘まり此明帝の時分杯ハ殊更
小多らつた下アル所ハ佛法を渡つてよりハ新奇な事ハ
小目も心も移る世の中故大に小道士共のけんひきとふ
りさうで有つた故道士の輩六百九十人を上表して明帝
が十四年の正月一日佛道と優り劣りを試みたいと願つ
たる所が然らハといふ事下其月の十五日小彼の白馬寺
小於て東の壇ハ道士の經論や符籙と云て所謂御符杯
の事を書た物を置き又西の壇ハ佛法の經論佛像舍利
杯を置き扱双方一火とつけたる所が道士の方ハ皆焼て

灰燼と成り夫のこゝろす日頃、駭を得たる所の呪術も
駭ふる火小入り履水の術しどし、たゞ事、此時、夫
と出来ず又佛法の方の物、一つとして焼あんだ下、
こゝに於て道士世に青くある佛といひその者、其悦ひ云
ふ汁りなく彼の摩騰、身を踊らして空に飛上り種々
の神変と現ひ、彼の法蘭、大梵音といふを發して佛法
の徳と宣明て天より花を降せ杯致したと申す事下、
此時男女千五百六十人一時小出家小成たいと云ふ事下、
其通り小を許し其中小道士の佛法小歸依して僧と成
たる者と六百二十人あり、夫を氣小して道士費叔
文と云ふ者杯に死んだ程の事下、又雒陽小於て寺を

十々所建て是より致して佛法の勢ひがましく熾小成て
下、此事、漢土大徳の僧共、こゝに云ひ立つる事
ふ就共られし例の幻術下元より佛法の幻術、此間も申
す通り釋迦の大工夫、甚手厚くおいたる事故
釋迦の靈の幸、事下、彼の幻術の本國たる天竺の婆
羅門共下すら皆佛法の幻術、さうする勢ひを取られた
る程の事あるものと漢土の道士共の生、幻術、と
ふして佛法の幻術と力くらべの成る事下、
彼の大論、小諸の外道の神通、
神通ハ文近有る事ありとある、此事下、
やうの譯を知らず、螳螂の左車小向、
譬の如く、慧の事と

仕出して大まか目小合つた事でアルに此後世々不弘は
つて天竺一僧をやつて経論をとりよせり又彼要よりハ
持て来り彼是宋元の代あたりより千三百年の間に佛
の経論を大概残るく漢土一渡つて来た下アル其間小國
の害と云つたる事指さるむる小暇ある既小是る為小
國と云るは身と云つたる王共と云るらん下アル麦小於
て世の儒者杯も其弊を考つて其時の王を諫め杯致して
も用へずありつた其諫めたる者を罪小行ひ杯も
代々の王共不誠小惑ひ果たりの下アル其諫めて罪小落
さ秋たる儒者の論でも韓退之の佛骨の表又ハ原道論或
ハ歐陽永叔が本論杯り者ハ甚た云る事共下アル一

俸釋迦の佛法とりよりの佛國での尚更の事漢土でも
實ハ餘計な物下アルと云ふぜといふ小佛法の経論共云て
有る道理ハ彼の飛行自在の神通ある方便の術を除て
見ると正味のらる所ハ只天堂地獄輪廻治心の四條をとり
分残る下アル是等の事ハ自分の國の古書小澤山小云
て有る夫ハまづ天堂梵天の事ハ天帝皇天后帝杯と云て
古書小飽り下其理不見え又地獄の説ハ彼の黄泉の古傳
説下其理不見え又因果報應輪廻の事も漢土でハ古くよ
り申したる事下其一ツニツと云いば左傳小禍福ハ門無
一只人の招く所といひ又ハ易の文小積善の家小餘
慶有り積不善の家小餘殃ありといひ又臣其の君を弑

子其の父を弑すも一星一朝一夕の事非ず依て乘る
所の者漸ふりと云ひ又遊魂を為す杯と有る類ひが大
き小輪廻又因果報應と同一道理也又治心と云つて
心と治め静と養ふの道と先莊の書或ハ淮南子杯り也
の又ハ醫書也素問聖樞杯り也物也飽迫其理を見え
ち也也也也也佛法の経論といふものハ総て漢土で
も餘計るもの也也然るを已國の書共小委く其理の
見えたる事と心つて無せりと佛法と弘め其國世々の
害と成つたるの事也御國を及んでかく手て
うぶ杯りやうも成つた事也但し其内儒者といふ者
ハいつと申す通り心の狭さもので已國讀む儒書も直不

併説と同ト意の語有るの事實有るのとツレと大
小腹を立り此共腹を立ても背を立てもコリヤふも仕方
無い其の腹を立てようも狭い心で書と讀む故眼とく
らミラやうの語とも見落して佛語計りとやうしく云
つて居るが此共若し此方を佛者だといふ一番佛者と
やりこのて仕まりれる下アハ又儒者の中も稀小ら
らの事の氣の付いたものも多し中も有りもきたらうけ
此共夫也又儒者佛説と同ト意の語有るといつてハ
都合の悪い事と見えて諺云猶のけしと墮すやう具
い物小蓋とするやう知らぬ顔して居たと見えろで己

出定笑語講本三終

